

所在地	地点	遺跡の種類	調査期間	調査面積	備考
京都府相楽郡精華町柘榴	1	瓦 窯			事業地外
〃 相和	3	散布地			〃
木津町曾根山	4	古 墳			円 墳
〃 〃	5	寺跡?	10月3日～10月21日	545㎡	大 仙 堂
〃 〃	6	散布地			所在未確認
〃 音如ヶ谷	9	瓦 窯	1953年 10月11日～10月16日	8,000㎡	1 基
〃 〃	20	古 墳	{ 10月16日～11月4日 12月18日～12月27日	125㎡	円 墳 ?
〃	17	散布地	1973年1月9日	950㎡	遺構なし
奈良市押熊町字堂頭	2	瓦窯跡	7月3日～9月28日	1,110㎡	6 基
山陵町別当谷	7	石のカラト 古 墳			保存計画
〃	8	瓦 窯	1970年		既 報 告
歌 姫 町	10	須恵器窯	10月6日～10月11日		1 基
〃	11	〃	7月31日～9月28日	30,000㎡	〃
〃	12	瓦 窯 須恵器窯	〃		6 2 基
〃	13	古 墳	9月25日～10月5日	125㎡	墳形不明
〃	14	散布地			未 調 査
〃	15	古 墳	9月25日～9月29日	60㎡	円 墳
〃	16	瓦 窯	1952年		事業地外
〃	18	散布地	1月8日～1月12日	20,000㎡	遺構なし
〃	19	〃	1973年1月12日	2,650㎡	〃

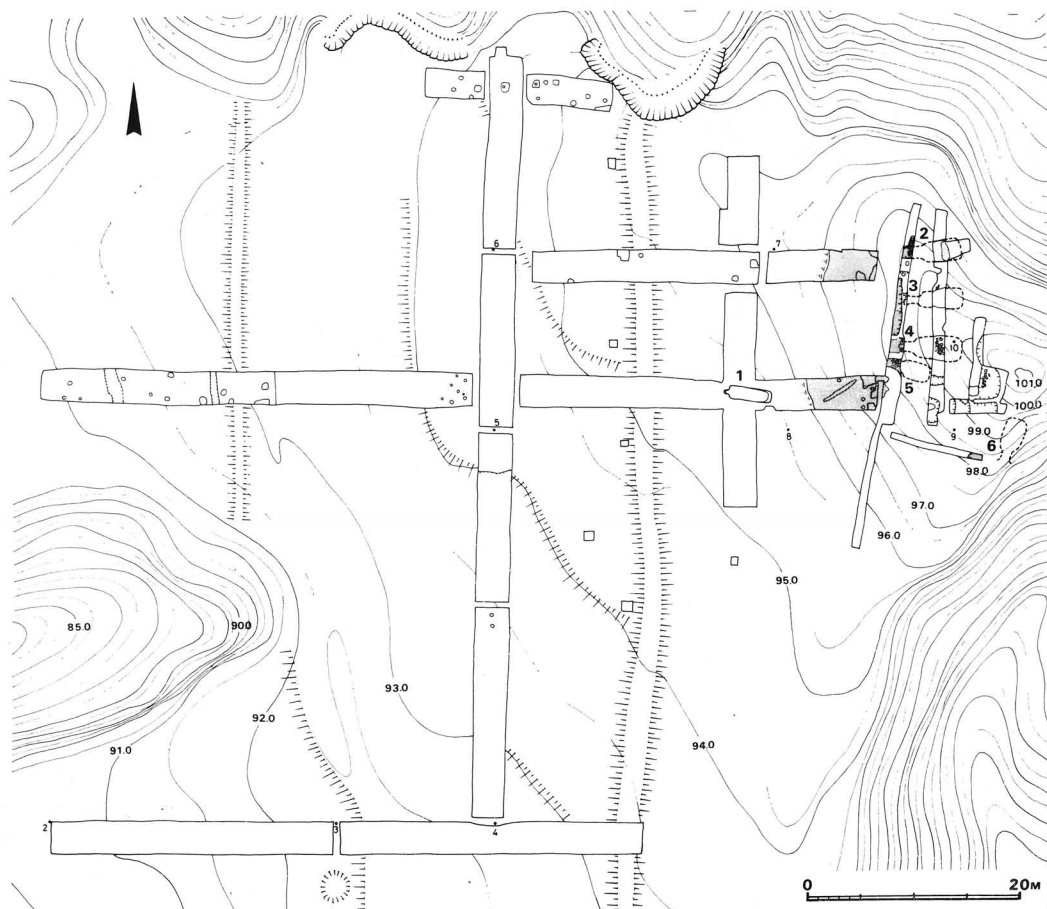
第1表 平城ニュータウン予定地内遺跡調査一覧表

Ⅱ 調査地点の概要

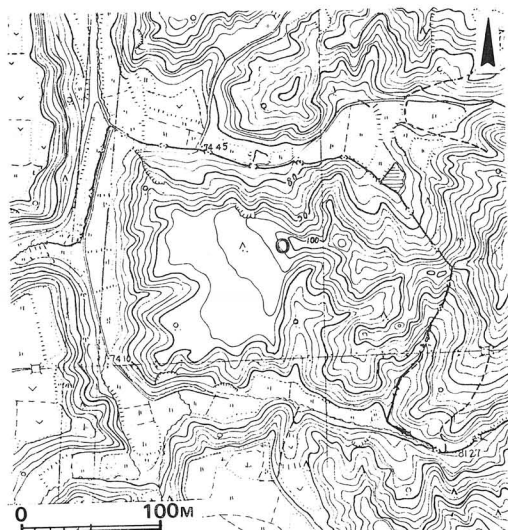
Ⅱ-1 第2号地点一押熊瓦窯一の調査

遺跡は奈良山丘陵の西北端にあり、東から西に伸びる尾根先端の台地上に位置する。この台地は、標高91～100mで、東北部に小丘陵があり最も高く、西南にしだいに低くなりながら平坦面はひろがる。調査以前では、この平坦面に注目し、寺院跡の存在を想定したが、調査の結果、その痕跡は全く認められず、この平坦面はかつて水田が営まれた跡であることが明らかとなった。この平坦面に続く東北部の小丘陵の西斜面で瓦窯6基の存在を認めた。この6基のうち1基は丘陵裾に離れてあった。他の5基は西斜面に並列して存在し、今回の調査では、トレンチ調査でその位置を確かめたにすぎない。

1号窯 西方に焚口をもつ東西主軸の平窯であり、これについては全容を明らかにした。全長4.4m、幅1.2m、深さ0.8m。窯の床は、西から東にやや上り気味である。燃烧室・焼成室の区別はなく、何らの施設も認められなかった。燃烧部の壁面及び床面は赤色を呈し、高熱で焼けているが焼成部は焼け面が明確でない。



第3図 第2号地点—押熊瓦窯—遺構配置図



第2図 第2号地点付近地形図

2号窯 西方に焚口をもつ東西主軸の平窯で、東半を崖に切り取られていた。窯の本来の長さは明らかでないが、現状で長さ3.5m、幅1.8m、深さ0.8mの規模である。

3号窯 2号窯の南約2.5mに並列する平窯である。窯の存否をたしかめる小規模な発掘のため、規模は不明である。焚口部での土層からみて、3回の改造が行なわれていることがわかった。

4号窯 3号窯の南方4mに並列する平窯で、規模は不明である。幅0.5mの焚口部では、両側壁に各々2枚の鬼瓦をたてて、軒丸軒・平瓦、塼などを組み合わせて構築しており、注意をひいた。

5号窯 4号窯の南0.8mに並列する平窯



第4図 押熊瓦窯堀立柱遺構

で、焚口周辺部を検出した。焼土と窯壁片などが多くみられ、更に、南北幅0.6m、深さ0.2mの東西溝などが検出できたが、窯体そのものは確認できなかった。

6号窯 小丘陵南斜面に存する平窯で、南方に焚口をもつ南北主軸の窯である。窯体の大半は前に切り取られ、規模は不明である。

そのほか、5号窯の南方約2mに窯壁片や炭灰層がみられ、更に1基の窯が存在する可能性がある。この地点からは、瓦とともに、焼きひずみのある須恵器も多く出土しているので、この窯は、瓦陶兼業窯である可能性が大きい。

これらの窯の検出から、その前面の平坦部に瓦製作に関する工房跡の存在を予想して、2・3のトレンチを設けた。その結果、掘立柱穴や溝などの遺構が検出できた。こ

れらは、遺物などからみて瓦窯との関係が充分推測できる。しかし、今回の調査範囲では、これ以上の所見はえられず、遺構の性格を明らかにしえなかった。出土遺物は、軒丸瓦68点・軒平瓦28点・面戸瓦2点で、平城宮で使用された瓦と同種のものが大半であるが、新型式のものもある。このうち、4号窯の焚口を構成していた4枚の鬼瓦の文様は2種あり、このうちの3枚は、先年、第8号地点で瓦窯を調査した際出土したものと同範である点注目される。これら瓦窯の出土軒瓦類から、6基の瓦窯は、奈良時代後半に作られたものであろう。

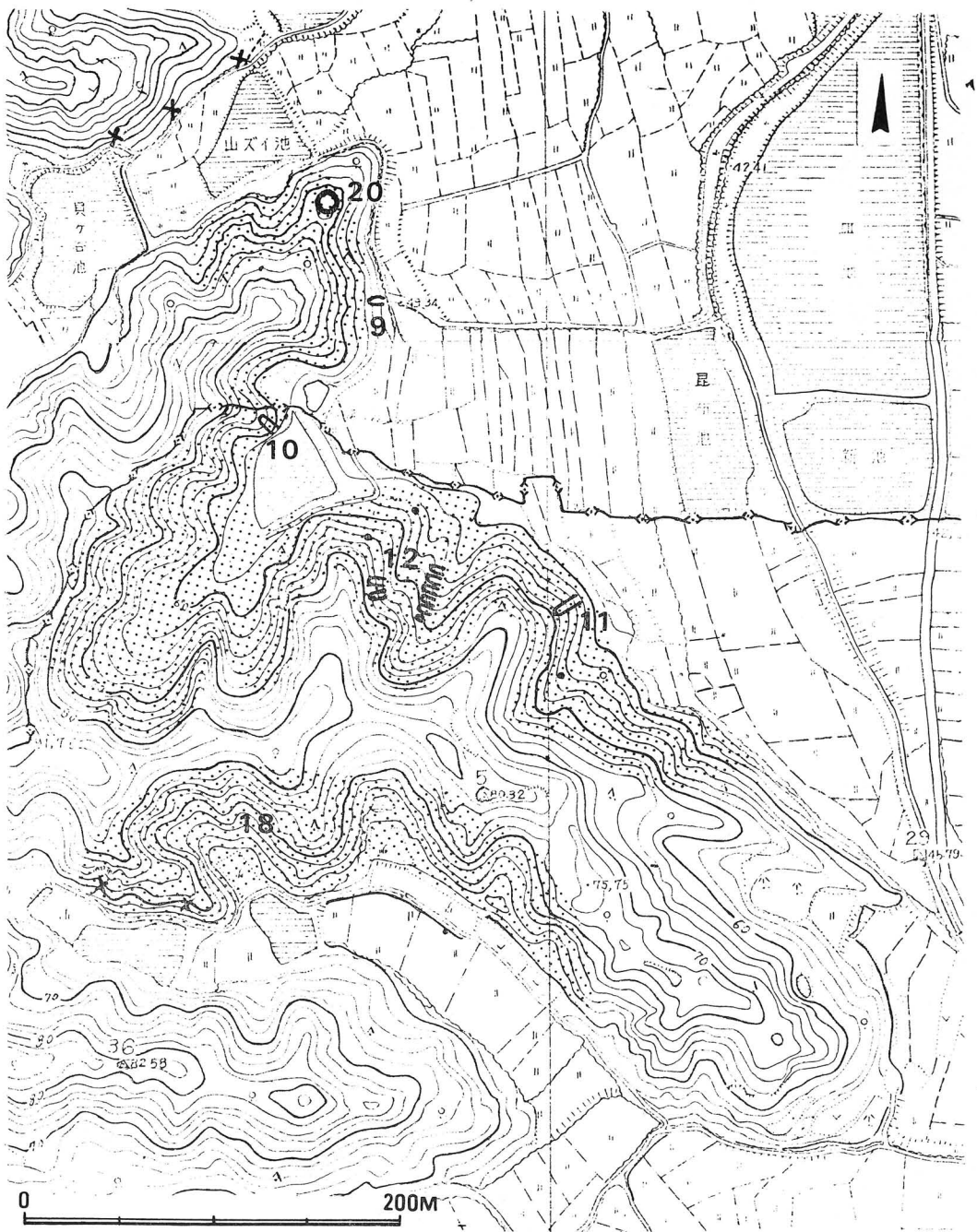
II-2 第9・10・11・12・18号地点の調査

平城宮跡から歌姫街道を北へ進むと、ゆるやかな登り坂になって、その両側には民家が並んだ田舎道となる。さらに進むと、両側が山林につつまれた丘陵地帯に入り、やがて道は、除々に下り坂になって、木津川南岸の広々とした平地に至る。これが古代の歌姫越えである。

街道がこの平野部へさしかかったところの西側には、水田との比高が40mくらいの支丘が東に向っていくつものびている。調査地点はこの街道の西側で、低い丘陵の斜面地一帯である。付近には、府県境がほぼ東西に通っており、奈良市歌姫町と京都府相楽郡木津町音如ヶ谷にまたがった地域である。

ここには、京都府側の一角に、1953年に調査した音如ヶ谷瓦窯（第9号地点）と呼ばれる窯跡1基が確実な遺構として知られるほかには、数ヶ所の遺物採集地点が分布調査で確かめられている。付近には、このほか、地形の状況からみて、窯跡等の存在が予想された。このため、調査は付近一帯約60,000㎡にわたって、丘陵斜面地の山林を伐採したのち、前後左右ほぼ5mの間隔で、約1m四方のテストピットを穿っていく方法を使った。

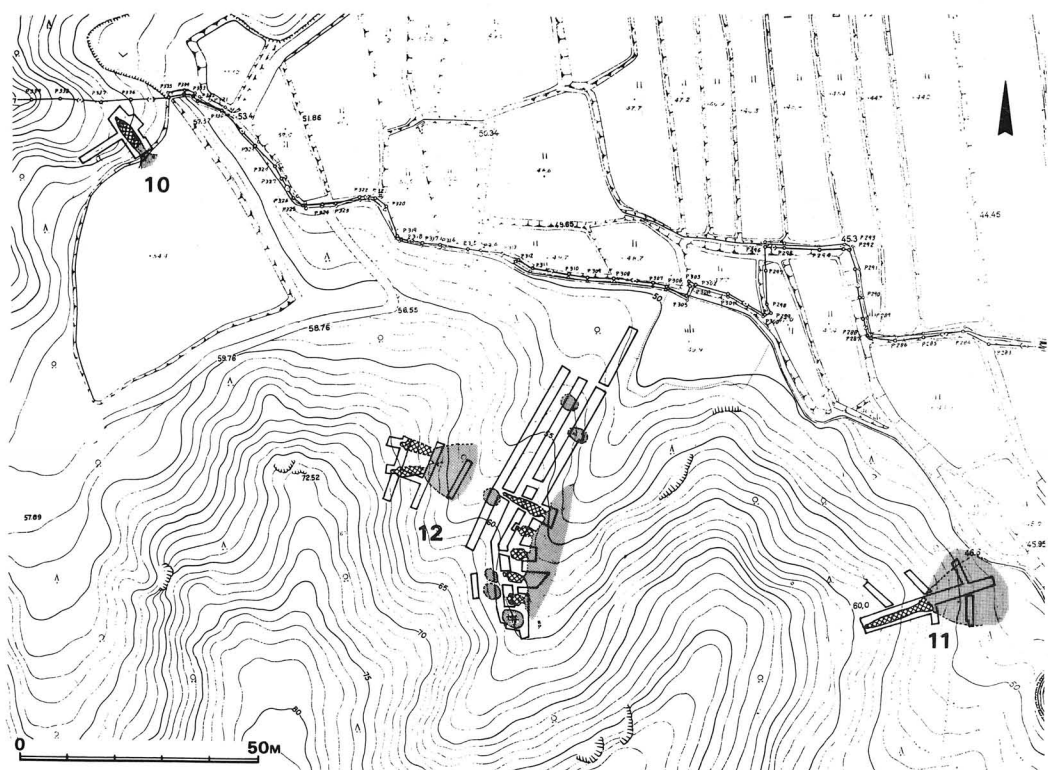
この結果、第12号地点では、瓦窯群集地1箇所6基-歌姫西瓦窯-と、若干離れて須恵器窯2基を検出したほか、単独遺物採集地点が2箇所あった。第10・11号地点では、須恵器窯各1基を



第5図 第9・10・11・12・18・20号地点付近地形図

検出した。また第11号地点でも遺物採集地点が1ヶ所ある。

第9号地点では、かつて調査された音如ヶ谷瓦窯1基のほかにも、付近の水田中に数基の同様な窯が存在すると思われるが、この部分については土地交渉の事情で今回は調査を見送らざるを得なかった。しかし、この水田に接する丘陵上およびその斜面地での調査では、瓦窯跡等の遺構は全く認められなかった。



第6図 第10・11・12号地点地形図

第18号地点は丘陵南斜面で、全長約250mの広範囲にわたって遺跡確認調査を実施したが、調査地域東部の谷あいでは、奈良時代の瓦および土器若干を包含する堆積土を認めたほかは、ほぼ全域が砂質土の地山で、遺構遺物は発見されなかった。

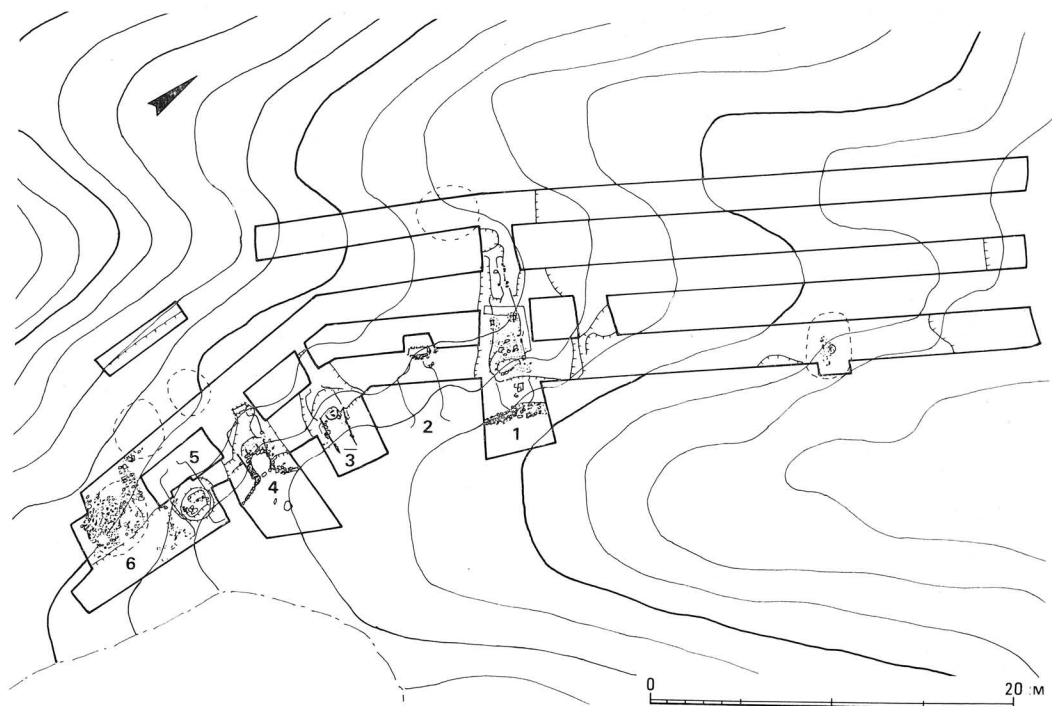
第20号地点の古墳は、竹藪として開墾されていることもあって、墳丘の形が不明確であったため、これまで古墳として知られていなかった。その後、円筒埴輪が採集され、古墳として確実にされるようになった。このため古墳の規模を明確にするための発掘調査を実施した。

II-2 A 歌姫西瓦窯の調査

テストピットによる調査段階以前から、地形の凹凸や、瓦片の散布状況から、瓦窯のあることが予想された。そこで、トレンチを設け、分布状況を調査した結果、瓦窯6基、瓦集積地3箇所を確認した。瓦窯群は丘陵の一山塊から東北に伸びる低い尾根の東南斜面に立地し、標高55m～60mの範囲に位置する。これらはすべて斜面の低い方に焚口をもち、延長約30mの間に並列して6基確認できた。

1号窯 全長9.5m、幅2mの規模をもち、この群の窯跡のなかでもっとも長大である。窯体の全容は確認しえないが、焼成室は、平瓦と粘土を相互につみあげた平窯の構造である。煙道部は全長4m、最大幅0.8mと長く、登窯風のものとなっている。焼成室の奥壁近くに、方約20cmの垂直孔が一对ある。恐らく追焚きに使ったものであろう。

2号窯 煙出し部を検出したにとどまるが、平窯に特有な煙出しで、後述する平窯と同様、分焰



第7図 歌姫西瓦窯 瓦窯配置図

柱をもち、壁は平瓦と粘土で構築したものである。全長4 m、幅1.8 m前後の規模であろう。

3号窯 平瓦と粘土で構築した分焰柱をもつ平窯で、燃烧室の一部を調査した。煙出しはトレンチで追求したが今回は検出できなかった。全長約4 m、幅1.5 mの規模である。

4号窯 今回もっとも内部まで調査した瓦窯である。全長5 m、幅2 mの規模で、分焰柱をもつ平窯である。窯は、煙出し部に至るまで平瓦と粘土を交互に積みあげて構築している。焼成室と燃烧室との境は、高さ55cmの段で区切られている。焚口部には、自然石が2個存在し、さらに、焚口部の左右には長さ2 m前後にわたって平瓦を積みあげて、焚口まわりの護壁をしていた。

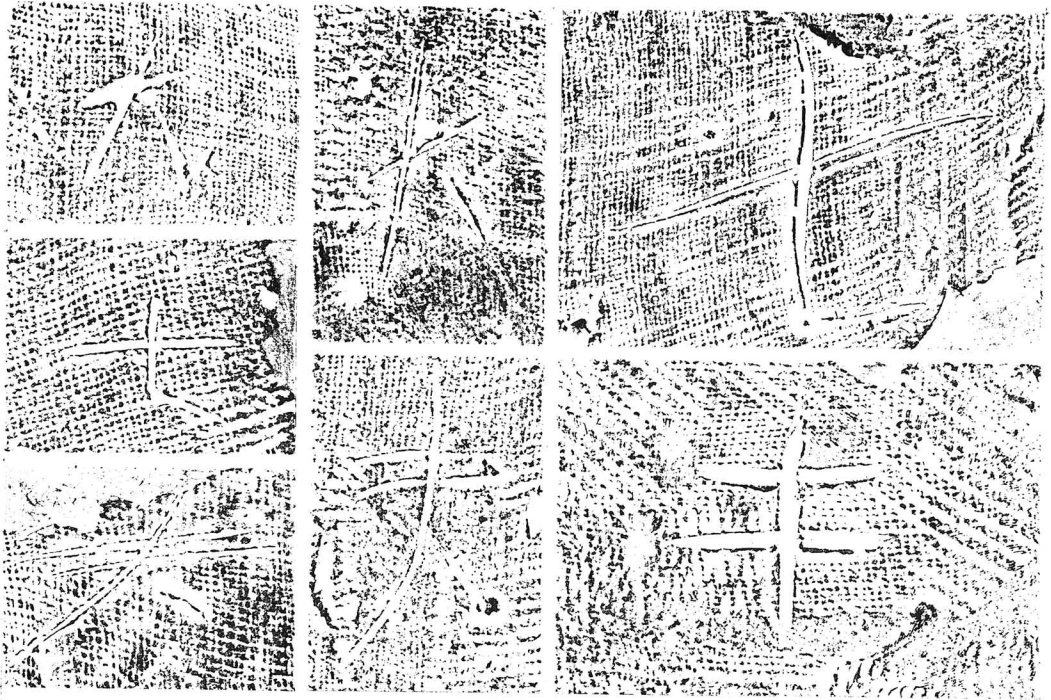
5号窯 焼成室と燃烧室との境の天井部を、一部調査したにすぎないが、その規模はほぼ全長4.5 m、幅2 mの平窯と考えられる。

6号窯 多数の瓦の散布と焼土の存在から窯を推定した。窯壁を検出しえなかったので、規模は不明である。この窯から、大仙堂廃寺出土と伝えられる宝相華文の軒丸瓦が2点出土した。

以上6基の瓦窯以外に、瓦が多く散布する地点を確認した。それらが瓦窯であるのか、瓦集積地なのか、明確には判断しえなかった。瓦窯については、保存度が非常に良好で、天井部及び煙出し部までをも完存するという他に例の少ない遺構である。また、瓦窯で焼かれた瓦は、前述の宝相華文瓦ほか1点をのぞくとすべて平城宮で用いられたもので、瓦当文様の比較から、8世紀の中頃に築造された窯であると言えよう。第8図の篋描瓦は4号窯から出土したものである。

II-2 B 須恵器窯の調査

須恵器窯は、第10～12号地点の3ヶ所で、計4基を検出し、その規模と形状を明らかにした。



第8図 歌姫西瓦窯出土篋描瓦

縮尺 1/1.5

第11号地点で検出した1基は、7世紀中頃の須恵器を焼いた登窯で、尾根東側斜面に立地し、標高52～59mの範囲に位置する全長13m、幅1mの長大な窯である。灰原も扇形に大きく拡がり、現在の水田中にまで遺物の散布がみられる。

第12号地点の瓦窯に近接して存在する須恵器窯は、2基が、2.5mの間隔をおいて並列していた。尾根東側斜面に立地し、標高60～67mに位置する窯は、いずれも急傾斜地に存在するため、地すべりなどの影響によって破壊されているが、煙出し部と焼成室の奥壁部を検出することができた。両者の灰原は重複していたが、ほぼ同時に築造されたことが明らかとなった。遺物は硯片をはじめ、多くの器種が出土し、前述の窯同様、7世紀前半のものであろう。

第10号地点で検出した須恵器窯は、東南に小さく派出した尾根の傾斜面に立地し、標高57～62mの範囲に位置している。全長10m、幅1.4mの規模をもち、焚口部分及び灰原は、現在の池の中に存在する。窯周辺から出土した遺物から築造時期は7世紀中頃のものと考えられる。

以上3ヶ所、計4基の須恵器窯は、いずれも、平面形を確認したにすぎず、窯体内についてはまったく調査を行っていない。

第11・12号地点内では、前記の遺構以外に、3ヶ所で単独の遺物を採集している。各所とも遺構の存在はみられず、単に、テストピット内で検出したにすぎない。遺物は、サヌカイト製のスクレーパー1点と、灰釉のかかった平瓶1点、および鉄鉢形須恵器1点である。

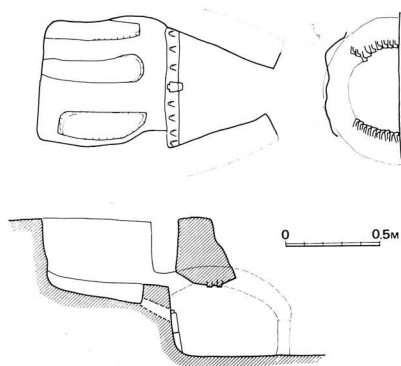
須恵器窯については、今まで、奈良山丘陵中で須恵器が製作されていたことは知られておらず、今回の調査結果は貴重である。瓦窯造営以前に須恵器製作が行なわれていたことと、平城宮の造営にともなう瓦窯構築とは無関係ではなく、非常に興味ある問題を有している。

付 音如ケ谷瓦窯の調査報告

第9号地点に所在する音如ケ谷瓦窯は、1953年4月29日に農道改修工事に伴って発掘調査された。調査には、京都府教育委員会より委嘱をうけた梅原末治、宇佐晋一氏等があたり、その際の調査報告が同教育委員会に保管されているので、ここに、新かなづかい等に訂正したうえ、紹介することとした。また、第26図19・21に使用の拓本は、現在京都大学に保管中のものである。

発見された瓦窯跡は、丘陵の裾に当る東南の崖に火口を開いて、新たに通じた道路の下方に主体がある。この道路にそって、水路を穿ったことから、下底が落ち込んで遺跡の所在が注意に上ったものである。工事の関係上おこなった今回の調査は、保存の上に考慮を払いながら、右の水路を中にして、道路下ないし崖の下辺の窯の主体部の状況を確認することに重点をおいた。

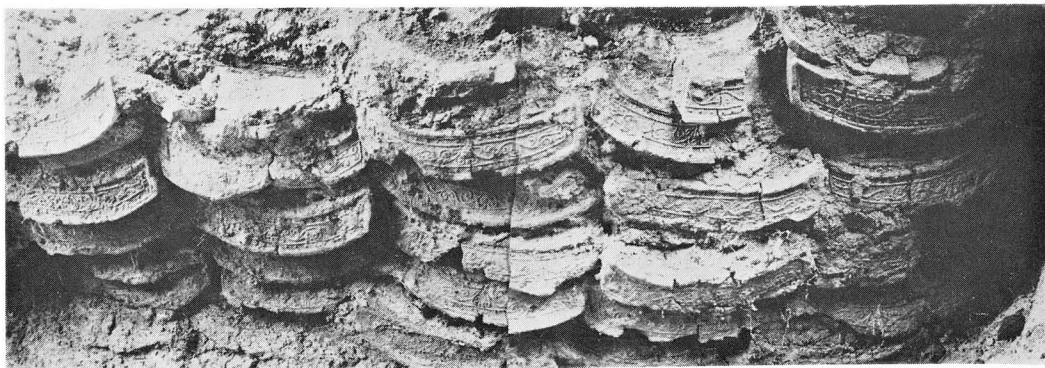
以上の調査の結果からすると、窯跡は平窯であって、割合によく原形をとどめたものであった。すなわち、崖の下に火床があって、廃瓦で構築されたその部分は、火焚口にまでわたって保存状態がよく、この火床の奥に開いた7条の火道が、道路下に位置した瓦を焼く設備の部分に続いていることは、付図に示すようである。同部の下辺には、火力の通ずる火床から続いた3条の坑道の存在が認められた。なお、この窯では、焚口から火床の壁面がすべて唐草文を表わした軒平瓦の廃品を利用して、その瓦当面を揃えて構築したことは、異例として注目される。



第9図 音如ケ谷瓦窯遺構図

調査中、道路下の窯の部分から右の火床の壁に使用したものと同一文様の軒平瓦の廃品若干と、それと組をなすように思われる軒丸瓦、大小2種等を検した。両者は文様なり作りから判断して、奈良時代の後期のものと思われる。

〔附言〕 本瓦窯は、割合によく原形をとどめたものであるが、水路が中央を通ずる関係で、現状のままの保存が不可能に近く思われた。そこで、崖の下にある火床の空洞をなす部分を、廃瓦と粘土とで埋め固めて、落ちこんだ水路の下辺と崖の東面をコンクリートで固めて、埋戻し保存することにして、この工事を木津町役場に依頼したことを、あわせ書き添えておく。



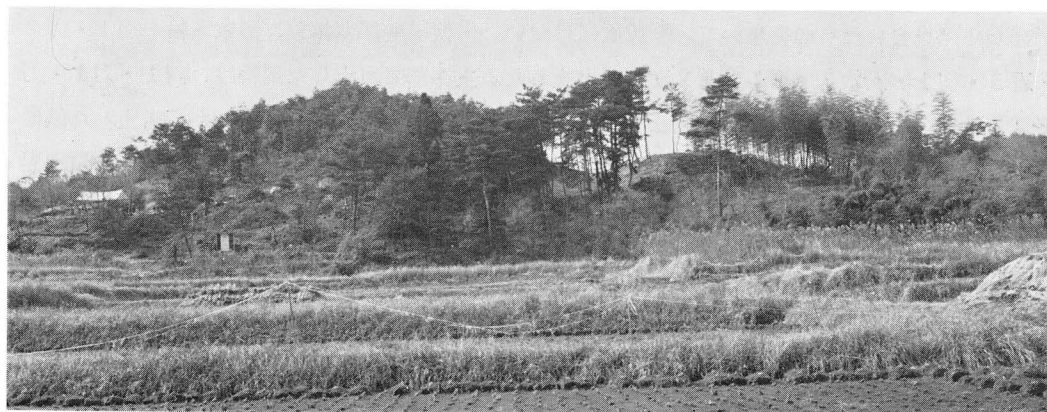
第10図 音如ケ谷瓦窯 窯壁

II-3 第20号地点—音乗谷古墳—の調査

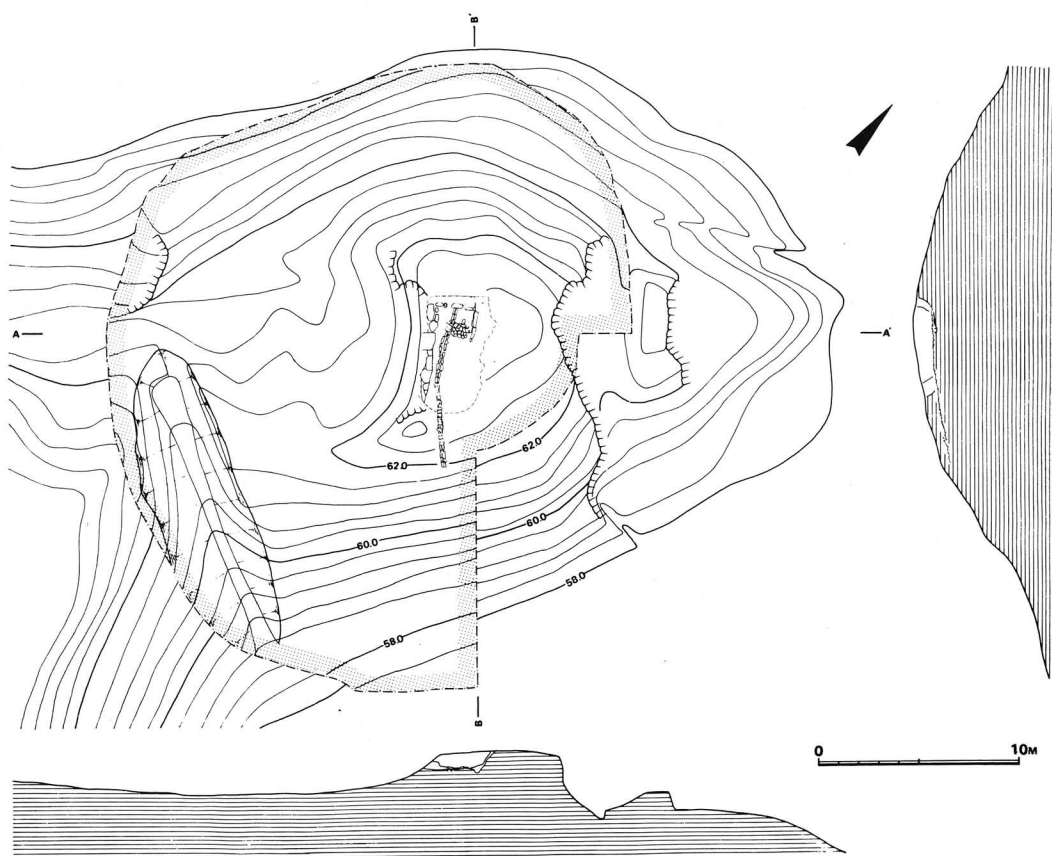
本古墳は、府県境より奈良山丘陵の京都府側へ東北にのびる支丘陵の先端部に位置し、標高63mの地点にある。この古墳は、昭和39年の分布調査の際には未確認であったが、その後の調査で埴輪が発見され、古墳であることが判明した。古墳の存在する丘陵の東側斜面裾部(60m東南方)には、先にのべた音如ヶ谷瓦窯がある。古墳は、原形をとどめておらず、とくに、北東部と西南部の削平は著しい。調査にあたっては、墳丘を四分法で発掘する方針ですすめ、A～Dの4地区に分割した。最後に、墳丘の築成方法を知るため、十字に幅1mのトレンチをいれ、盛土の観察を行なった。墳丘の調査は、東北側の竹やぶを除き、ほとんど全域を発掘した。その結果、墳丘の南を画する形で濠(長さ15m以上・幅4m)を検出した。主体部は、墳丘の中央部に位置し、石室であるが、盗掘で破壊され、石室の痕跡を示す若干の石材と石室の裏込めの粘土だけ検出した。石室床面より発見した排水溝は、盗掘がおよんでおらず、完全に残っていた。

墳丘 本来の墳形を想定する直接的な資料は得られなかった。しかし、盛土の残存から考え、かつ、円墳と見なした場合、最も小さくみつもって、直径21.4mの古墳になる。この復原径の墳丘裾部と濠との距離は、2mほどしか離れていない。この濠を古墳に付属するものと認めた場合、墳丘は径25.4mとなる。なお、濠の埋土中に切りこまれた長方形の土壙(長さ0.9m・幅0.5m・深さ0.1m)を検出した。土壙の壁面は全体に焼けており、性格は不明である。墳丘には葦石や段はみられない。墳丘は地山をある程度削り出し、その上に盛土して築成したと考えられる。盛土の厚いところは東側斜面であって、現状で約1mある。

内部主体 石室に用いられた花崗岩は、盗掘によりほとんど抜き取られている。検出できたのは、石室石材の花崗岩若干・同抜とり跡・礫床の一部・排水溝のみである。石室の構造は、裏込めの粘土が四辺とも存在しているところから、横穴式石室と考えた場合は、和歌山市岩橋千塚・寺内18号墳、滋賀県蒲生郡安土町・竜石山第3号墳、奈良県北葛城郡新庄町・二塚古墳造り出し部石室のように、羨道床面が石室床面より1段上った構造になる。この場合は東南方向に開口した横穴式石室となる。しかし墳頂部の埴輪出土状況からみても、本来の墳丘盛土が現状より著しく高かったとは考えにくく、竪穴式石室の可能性も捨て去ることはできない。石室の規模は、抜



第11図 音乗谷古墳遠景 東から



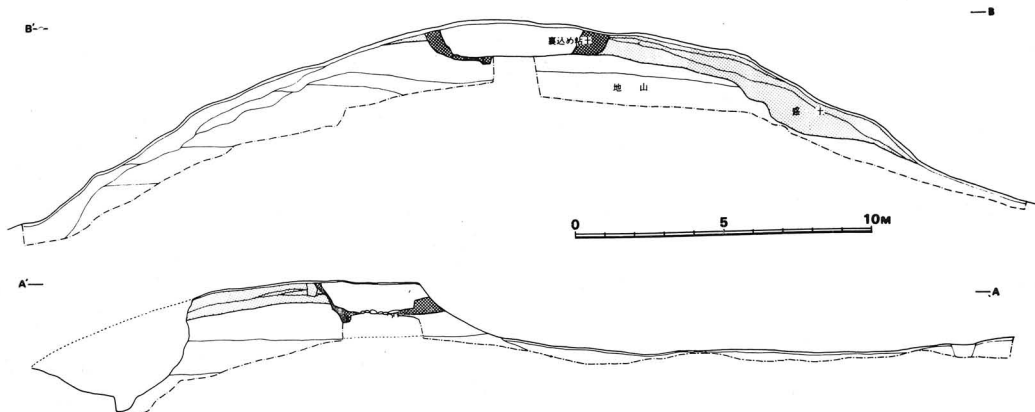
第12図 音乗谷古墳 墳丘実測図

き取り痕跡と裏込め粘土から判断して、幅2m、長さ4mほどのものであろう。

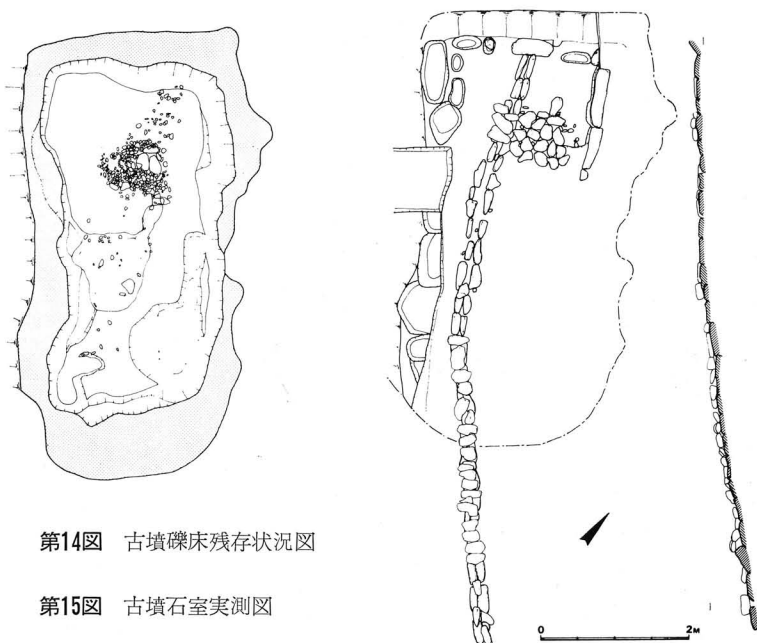
排水溝は、手頃な河原石を奥壁から二列にならべた簡単なもので、底石はない。石室を出たと考えられる地点より扁平な石で蓋をしている。この排水溝は石室の中央ではなく南にかたより、弧をえがいて南東へのびている。全長8mほどで、東側斜面に排水するようになっている。

遺物 埴輪は、墳頂部で2ヶ所、濠で2ヶ所かたまって出土したほか、斜面からも検出した。墳頂部から発見されたものを除いて、原位置にはない。円筒埴輪15個体分、形象埴輪の髷1・蓋2・盾3・靱1・人物2・猪1・馬2などが出土した。主体部で出土した遺物は、剣1・刀1・刀子2・鉄鏃6・鉄製金張雲珠1・碧玉製管玉1・須恵器10個体分である。礫床から出土した鉄鏃・雲珠がほぼ原位置であったほかは、ほとんど盗掘墳の再堆積土層中より出土している。須恵器は、6世紀前半のものと後半のものがあり、2回の埋葬を考えることができる。

以上のべたように、当古墳の築造年代は、出土遺物から、6世紀前半に求めることができる。しかし、古墳の規模・墳形・石室の構造については、盗掘および後世の削平などのため、その性格を充分確認するまでに至らなかった。なお、石室の構造に関しては、極めて注目すべきものがあり、また、奈良山丘陵北斜面に存在する数すくない古墳のひとつとして、学術的意義は非常に大きいものといえよう。



第13図 音乗谷古墳 墳丘断面図

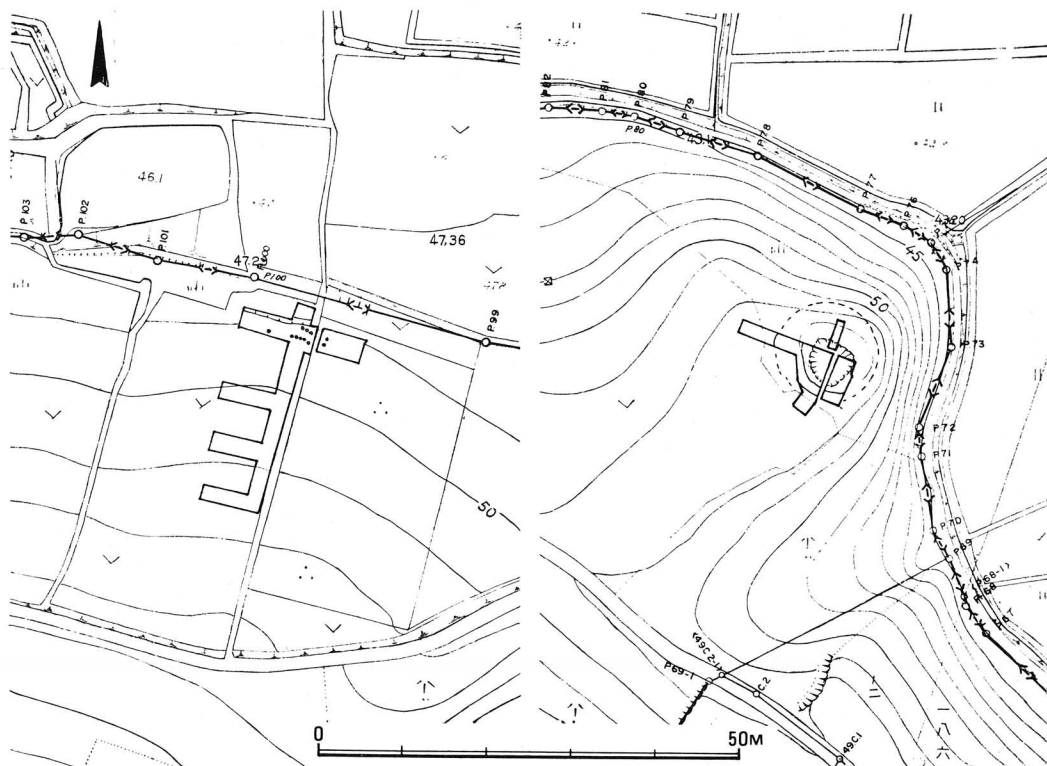


第14図 古墳磔床残存状況図

第15図 古墳石室実測図

II-4 第13号地点古墳の調査

第13号地点は、奈良山丘陵の東端に近いところで、南から東北にのびる丘陵の末端に位置する。発掘前、耕土中から多量の土器を採集しており、中世末くらいの遺構の存在が予想された。まず、南北方向に14m×2m、東西に6m×2mのトレンチ3本をE字状に設定した。耕土を排除した結果、明確な遺構は検出できなかった。その下層の黄色砂質土で、平安時代初期とみられる土壌を、また、地山面で数個の小穴及び土塊状の遺構をそれぞれ検出した。ついで、南北トレンチを北に11m拡張した。その結果、トレンチの北端から4mの位置で、東西方向に連なる2列の円筒埴輪列を確認した。埴輪は1m間隔で、南側列で5本、北側列で3本検出した。埴輪は、径30cm前後で、タガ2段目まで残っている。更に、東と西へトレンチを拡張したが、東で埴輪の



第16図 第13・15号地点地形図



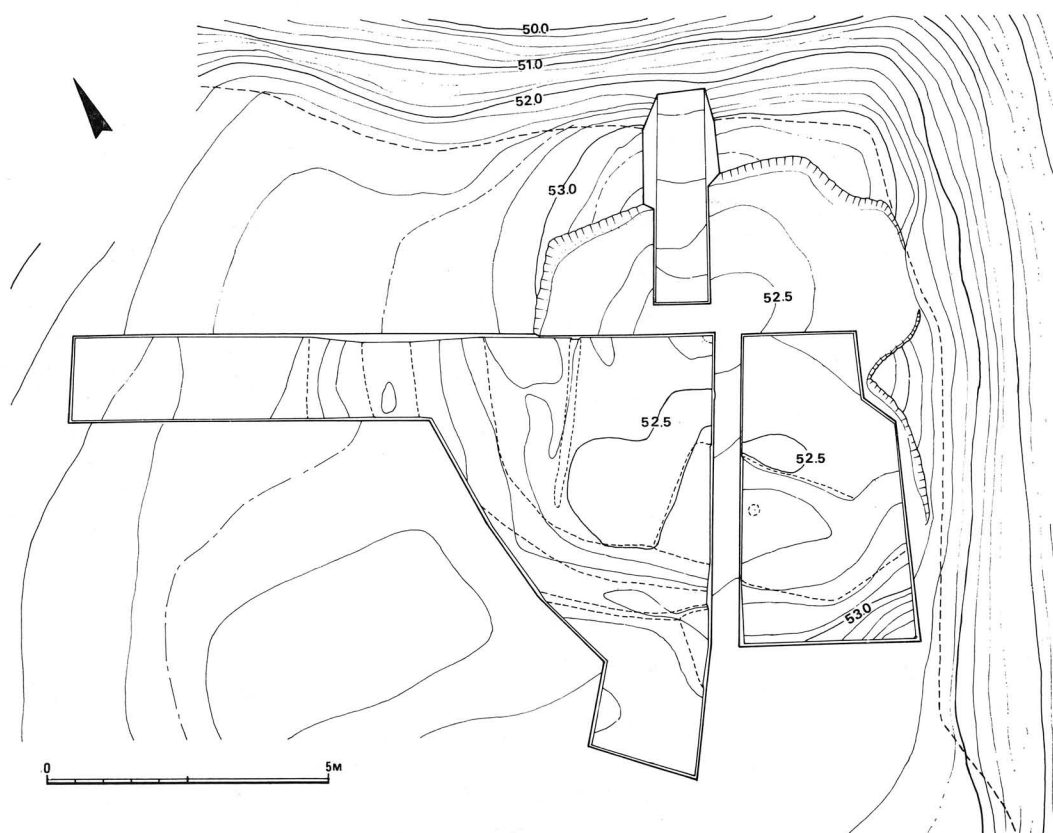
第17図 第13号地点古墳円筒埴輪列

抜きとり穴を2個検出したにとどまる。埴輪列の北には、濠状のものがある。この濠状のものが古墳の周濠にあたるものとすれば、この埴輪列は、古墳の第1段目を囲繞するものとしておかれた可能性が強い。今回は、一部分の発掘であったため、古墳の規模・形についての詳細はわからないが、濠状のものが東西へ直線的にのびていることから、円墳ではない可能性が大きい。

Ⅱ-5 第15号地点古墳の調査

第15号地点は、第13号地点の東250mで、同じ南からのびる丘陵の東北端に位置する。発掘前の古墳は墳丘の大半が土取りされており、わずかに北裾部の一部をとどめ、裾部とみられるゆるやかな高まりの形状から、かろうじて、径10m前後の円墳が推定された。なお、昭和39年度に土取りをした際に、当地点から遺物が出土している。これについては、第29図(1～3・5)に掲げておいた。

調査は、墳丘の南側半分と、さらに周濠を確認するための、幅1.5mのトレンチを西側に設定

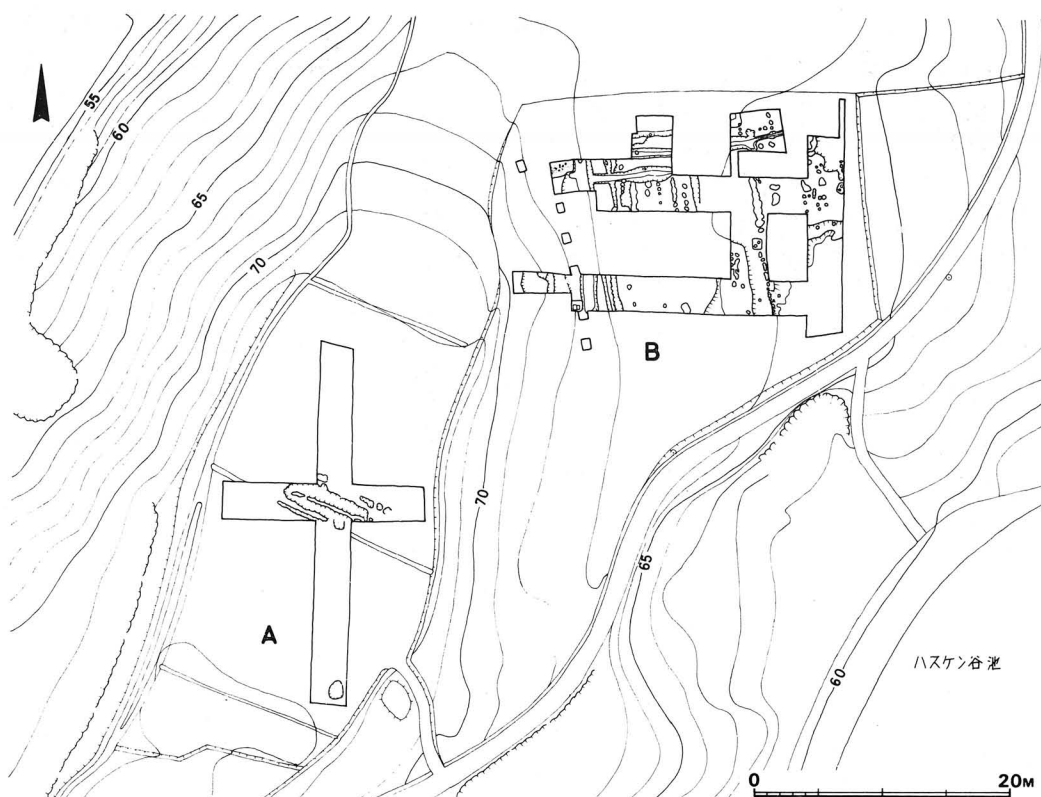


第18図 第15号地点古墳 墳丘実測図

した。更に、墳丘の築成法を知るため、北側の墳丘の残りの部分に、1 m幅のトレンチを南北に設定し調査した。主体部にあたる位置は、地山の一部分がすでに削平されており、その痕跡すら認められなかった。墳丘は、旧地表を地山面まで削平し、そのあと積土をおこなっている。現状でもっともよく残っているところで、積土の高さは0.9mである。墳形は、幅約2 m、深さ0.2mほどの浅い周濠からみて、円墳とみられ、その規模は10mほどのきわめて小規模のものであった。表土中から円筒埴輪片十数片が出土している。また、西側の周濠に近い位置で、鉄斧1、また主体部が復原される中心部で、須恵器の甕1が出土したが、いずれも表土中である。須恵器の甕は、全体の形態をとどめており、その特徴から5世紀末頃のものとして推定される。

II-6 第5号地点の調査

遺跡は、奈良山丘陵の東北端で、第20号地点の北北西約500 mに位置し、標高65～72mの地点にある。西南からのびる支丘陵の尾根の比較的平坦な部分と、東側斜面の平坦地の2ヶ所を調査した。発掘にさいし、前者をA地点、後者をB地点とした。この発掘地点付近一帯は、古くから、奈良時代の瓦を出土する場所として、薬師堂廃寺、あるいは大仙堂廃寺と称されていた。今回の調査は、寺院跡の存在を確認する目的で行なったが、それに関連する遺構を発見するまでには至らなかった。



第19図 第5号地点（大仙堂）遺構配置図

A地点 尾根を開いた2枚の畑に3×27mの南北トレンチ、直交する3×16mの東西トレンチを設定した。しかし、地山まで僅か20cm～30cmで、包含層すら認められないという結果に終わった。耕作土中より、奈良時代の瓦が数片出土したのみであった。

B地点 A地点より東に約5mほど下がった茶畑と荒畑に、東西方向に並行して3×17mの2本のトレンチ、その東端に3×16mの南北トレンチを設定し発掘を進めた。A地点と同様、耕作土下はすぐ地山になり、部分的に攪乱を受けている。トレンチの東南隅で、大きな落ちこみの攪乱層中より、奈良時代および中世、近世の瓦が出土した。このため、斜面の茶畑に窯跡の可能性を考え、南側東西トレンチを斜面まで延長するとともに、付近数ヶ所に壺掘りを行なった。窯跡は確認できなかったが、斜面から平坦地へ移行する裾部より、室町以降の巴文軒瓦を含む多量の瓦と灯明皿の堆積層を検出した。その下層は、幅1.5mほどの溝状遺構となっていた。同時期と考えられる遺構として、北側東西トレンチ延長部より、東西溝が発見され、ここからも中世以降の瓦や灯明皿が出土している。このほか、素掘りの円形土壇(径45cm・深さ40cm)に一字一石経を埋納し、その上に地蔵像のある2枚の石で蓋をした遺構が見つかった。江戸時代初期のものであろう。

以上のべたように、今回の調査では、寺院の存在をうらづける遺構は発見できなかったが、B地点における大量の中世以降の瓦の出土状況から考え、付近に寺跡を推定することができよう。強いていえば、現在、竹やぶとなっている発掘区に北接する平坦地がその候補地の1つである。現段階では、奈良時代までその存在を溯らせることはむづかしく、中世以降の寺跡と考えた



第20図 伝大仙堂出土軒丸瓦 ▲



第21図 第5号地点B地区全景 ▶

ほうがより妥当であろう。奈良時代の瓦が混在する意義に関しては、奈良山一帯に、奈良時代の多数の窯跡が存在すること、奈良時代寺院の立地としてはやや一般性を欠くことからして、付近に窯跡の存在する可能性を考えることができる。

II-7 第17号地点の調査

奈良山丘陵の東北端に位置し、南から北へ突き出た丘陵の西側斜面にあたる。この斜面の裾に、幅3m、長さ34mの東西トレンチを設けて調査をおこなった。その結果、近年の耕作にかかる数条の溝と、地山を削平した段が認められただけで、遺物も中世以降の土器、瓦類が若干出土したにすぎなかった。

II-8 第19号地点の調査

奈良山丘陵の東南端に位置し、丘陵の南側斜面約2700㎡の地域にわたって、150ヶ所ばかりの試掘坑を穿って、調査をおこなった。地表より50cm～70cmで、灰白色の地山粘土に達した。調査区中央部の黄褐色の山砂層中で、奈良時代の土馬の足2点と土器片数点が出土したのみで、遺構は認められなかった。

III む す び

平城宮の造営に際しては、我々の想像を越える多量の屋瓦を必要とした。そのほとんどは、平城京の北方につらなる奈良山丘陵一帯で製作され、そこから宮へ供給されていたと考えられる。しかし、奈良山丘陵に存在するこれらの瓦窯については、その分布状況や構造、さらに製作瓦の種類など、最近までほとんど知られないままであった。1970年におこなった第8号地点の山陵瓦窯の調査や、1972年に実施した今回の予備調査（押熊瓦窯群・歌姫西瓦窯群）は、平城宮瓦窯についての従来の空白を埋めるという意味で、非常に大きな成果をあげたものといえる。さらに、